

## インドシナにおける人権問題

— 現地での難民救援体験から —

小 野 修

1

わたしたちボランティアの一行は夜中にバンコクを出

発した。総勢一一名をのせた日本製のヴァンは、後に救援の医薬品をのせたトラックを一台従えて、深夜の国道を時速百キロで東北に向かって四百キロの道を走った。車内は満席で身動きもならず、運転手と助手が眠気ざましにヴォリュームをあげて鳴らしているタイの演歌の哀調をおびた単調なメロディーが胸に痛切にしみわたる。二時間ほど走ったあと、細目にあけた窓から吹き込む風に

ぞっとするような異様な臭気がまじりはじめると、それが屠殺場からくるもので、地方都市が近いことがわかる。

燃料補給のためにガソリン・スタンドにとまる約二十分間、車の外に出てほっとして暗い夜空を見上げて背中をのばす。裸電球が並んで光っている終夜営業の売店で冷やした豆乳を飲んだ。標識や広告がすべてタイ語なので現在地の名もわからない。スリンと思われる町の近くで、わたしたちは幌つきの人員輸送用に改造した小型トラックに乗り替えた。やがて山のあいだの坂の多い道に

なり、対向車もなく、フルスピードで走る車にたたきつけるように雨が降った。激しくゆれる荷台の上で向い合つて二列に座り、放り出されないように幌の下の鉄枠を必死でにぎっていると手がしびれてくる。雨のしぶきが吹きこみ、気温が急激に下りはじめ、わたしたちは無言のうちにジャンパーをはおった。雨が止み、藍染めのような色をした空にまだらに雲がひろがり、夜明けが近づいているのがわかった。車が南下しはじめてしばらくすると舗装が切れ、疎林の中の凸凹道に入った。空はすっかり青味を帯び、道の両側の木立のシルエットがはつきり見えるようになり、大波にもまれる小舟のように前後左右に車が激しくゆれて進むうちに、その道が少くとも四車線はとれるほどの幅広いぬかるみの道であることもわかってくる。そして朝陽の最初の一条の光が道はたの木々の梢をとらえるころ、わたしたちはほっとして、話したり笑ったりしはじめた。荷台の一番後に坐っていたカンボジアの青年K君の横顔に朝陽が射していて、彼が

「祖国の土を踏むのは七年ぶりです」と日本語でいって微笑しているのをみて映画のようだと思った。不意に車がとまり、人声がし、再び発進した。竹竿でつくった簡略な遮断機の下をくぐると急に道がせまくなり、ブッシュの中の小道を一キロも行かないうちに車がとまり、わたしたちは目的地についた。

幌が額縁のように囲んでいる荷台後部の空間に銃を肩にかけた人物が一人あらわれた。背景の若葉の色と同じ草色の木綿の服に、同色のアンパン帽をかぶったクメールの兵士を見たのはそれがはじめてだった。「ここで降りて歩くのだそうです」とK君が言った。トラックを降りると、わたしたちが道の行きどまりにいたことがわかった。手荷物をさげて歩きはじめると、周辺の草むらの背後からどこにもなくクメールの兵士があらわれ、わたしたちに近づき、わたしたちの手荷物を丁寧に受けとるとポーター役をしてくれた。彼らは一様に少年兵のよう

であり、純情そうな表情で、こちらから話しかけると、はにかむような微笑をみせた。彼らの中には銃のかわりに新品らしい黒のこうもり傘をもっているものもいて、不意の雨にそなえた出迎えの心づかいがしのばれた。

わたしたちは草地をぬけ、雑木林をぬけ、小山をまくようにして三キロばかり歩いた。前夜の雨であたりはしっとり濡れており、小道のところで足許の草が刈ったばかりの香ばしい匂いをたてていた。わたしたちは兵士たちと前後しながら山道を一列になって歩き、わたしは何度もカメラのシャッターを押してその姿をうつした。

山道には至るところに陥し穴が掘ってあり、その上に臨時にわたした丸太の上を注意深く進んだ。穴の中には先を剣のように尖らせた竹が針のように上を向いていたし、頭上にはハリネズミのように竹の針を植えた太い丸太がいつでも仕掛けられるように樹の枝に結ばれていた。夜、この地域にしのび込むものは、こうした原始的

な武器のほか、道路のわきの方々に仕掛けられた簡易地雷や、踏むと小銃の弾がとび出す仕組みの「わな」の報復をうけることになる。

わたしたちは山上の村につくと、すぐ宿舎に案内された。樹高二〇ないし、三〇メートルはありそうな高木が繁っているあたりが、木蔭の広場になっており、そのまわりをかこむように二〇坪ほどの土間の小屋が立っていた。あたりは美しくはき清められていて黒い地肌にまだらに日光が射し込み、その第一印象は鎮守の森の神殿付近に来たような雰囲気である。おそらく、大和朝廷の時代の板葺きの宮もこのような感じではなかったかと思われる。わたしは妻とその宿舎の中に入り、土間に三つ並んでいるしつかりとつくられた木の寝台のひとつに腰をおろし、蚊帳をおろして横になった。広場に面してオリヅ色のテント地をカーテン代りにつるしてあるので室内は眼りをさそう光量になっている。あたりは森閑として鳥の声聞きこえるほか、遠くでモールス信号を打つ音

がときおりきこえてくるだけである。腕時計は八時すぎを指している。わたしたちは二時間ほど仮眼をとったのち、食事、そしてそのあとに色々と行事が予定されていた。眼をつぶると、少年の頃、夏休みの林間学校でこれと似たような気分を味わったことを思い出した。しかし、今、わたしたちはボル・ポト軍の司令部の近くにきていたのだった。一九八〇年の夏のことである。

2

一九七八年五月、わたしはアメリカの中央部のネブラスカ州を旅行中だった。カーニ市のある知合いの家で見たテレビ番組にわたしは衝撃をうけた。それはユーゴ国営テレビのチームが世界ではじめて取材した民主カンボジアの国内の様子であった。一九七五年のプノンペン解放以来西側の特派員を一切しめ出していたこの国は文字通り謎の国であった。同じ親中国派であったユーゴの国営テレビの取材であったが、画面にあらわれる風物は一

種の異常な零囲気を伝えていた。第一にそこで働いている人々は女性か子供たちばかりだった。工場で大きな機械を懸命に操作しているのは少年たちであり、運河の土木工事にあたる婦人労働者の群れが黙々と蟻のように堤を上下しており、ナレーターは、大人の姿が少いことを不思議だとしていた。少年たちの表情はかたく、こわばっていて、何かにおびえているようだった。画面の最後にボル・ポト首相はたしか、新しい国づくりは新しい世代にしか期待できませんという意味のことを云って微笑した。わたしは不安を感じた。首相の言った意味が何をあらわしているのかをうすうす感じていた為である。当時、アメリカの週刊紙はカンボジアで何か得体の知れぬ怖ろしい事態が進展しつつあると書きたてていた。中には、数百万人が殺されたのではないかと推測するものまであった。それは、あたかも、世界中に向って、この蛮行をやめさせる政府はいないのかと叫んでいるような雰囲気だった。国内で何が進行しつつあるのかがわからない

いまま、噂ばかりが次第に大きくなっていった時期が一九七八年の秋だった。その年もあと数日で終ろうとするとき、ベトナム軍二五万がカンボジアに侵入、十日のちにはプノンペンを占領、ポル・ポト政権はその正規軍（「クメール・ルージュ」）と共にタイ国境近くまで追いつめられ、ベトナム占領下のプノンペンにはヘン・サムリン政権が樹立された。こうしてカンボジアの全土はクメール・ルージュの支配する山間部をのぞき、ベトナム軍の支配下となって今日に至っている。中国はベトナム軍のカンボジアへの侵攻後、「懲罰」の意味をこめて中越国境で戦闘を起したがベトナム軍の頑強な抵抗に会い大量の犠牲者を出して撃退されている。この状況をどうとらえるかという課題は複雑に見えながら単純である。ポル・ポト政権が国内的にどのような国家的犯罪を犯したにせよ、ベトナム政府が行ったことは歴然とした侵略行為であり、民族自決の大原則を犯している。従って、国連総会が三度にわたって行った議決が、カンボジアか

らの外国（ベトナム）軍隊撤退の要請であったことは当然である。問題を複雑にしているのは、カンボジア問題が中ソ対立と、ベトナム戦争の帰結であったことである。一九七五年米軍は大量の軍需物資をのこしたまま、南ベトナムから撤退し、約一ヶ月のち南ベトナムは北ベトナムの電撃攻撃によって征覇統合された。ベトナム政府はソ連の支援を受けていたためにベトナムと中国との関係は急激に悪化する。ベトナム戦争中、南ベトナムへの北からの侵攻はラオスとカンボジアをへて行われた。この「聖域」を米軍にみとめさせ、同時に北方からの支援のルートとして温存させて、カンボジア領内に百万に及ぶベトナム人の滞留を許したのもシアヌークであったが、滞仏中、一九七〇年のロン・ノル將軍によるクーデターがおけると中国に逃れ、その結果、一九七〇から七三年アメリカ空軍による聖域の大規模爆撃を許したのもシアヌークだったのである。こうして、聖域で数十万のカンボジア人が死に、数百万人のカンボジア人難民はプ

ノンペンに流れ込んだ。平時の六倍以上の人口をかかえたこの首都はあらゆる都市の機能を失いかけていた。クメール・ルージュがノンペンに入った一九七五年の状況は、このような異常さの連続の中にあった。ポル・ポト軍のゲリラ組織はノンペンを占領維持するには兵力も機動力も小さすぎた。彼らはノンペンをはじめとし、都市住民を全員農村に下放する計画を立て、実行した。このことによって、多くの餓死、病死、農村における苛酷な労役による衰弱死そして反抗分子の処刑などによって、多数の人命が失われたことはたしかである。すでにベトナム共産党と不和となっていたポル・ポト政府はベトナムと国交を断絶、中国の文化大革命の思想的影響下に人民公社型の社会主義を強行した。この間、ベトナムとの国境紛争がたえず、一九七九年末のベトナム軍の大規模侵攻の口実を提供しつづつあった。

海のような農民の中に浮かぶ島のような都市、その都市の中核を華商ないしは、ベトナム商人が掌握し、商業

資本の投資収益が国際金融組織を通じて国外に流出し、カンボジア国民の大多数はこの悪循環が続くかぎりほとんど永久の絶体的窮乏化の状況から逃れることができない——この分析は現在の民主カンボジアのキュー・サンパン首相がかつて留学中パリ大学に提出した博士論文『カンボジア経済と工業化の問題』の主旨であった。ポル・ポト政権下で党の議長をつとめていた同氏が、華商の財産の国による接収と、貨幣の廃止を実行させたのもそうした論拠にもとづくものであった。貨幣を廃止しない限り、ノンペンでの恐慌状態は、商業資本による食糧の全面的買占めがはじまるのは十分に予想されたのである。しかし、それにしても、民主カンボジア政権樹立後の強権的な文革的農村中心路線の踏襲は、都市生活者だった人々に非常な困苦を強いることになった。いわゆるオンカー（組織）とよばれる人々の決定に逆うことは死を意味していたということは大いにありうることである。肉体労働こそが至上の意味を与えられている事態に

あって、知識人や僧侶などがその職を追われ、きびしい監視下でなれない労役に服さねばならなかったことは事実であつたろう。いわばひとにぎりの人間によって国民の利益が着服されていた時代にかわつて、他のひとにぎりの人間が新たに実権を掌握し、人民の名によってたて

た生産計画の実現のために強制労働を組織する。ここには民主主義もなければ市民の権利もない。以前の体制の悪は金権に由来したが、それにかわつた体制は強制権力による人権剥奪をもたらした。その目的がどのような高邁な理想に彩られていようと、人民は夢を喰つて生きることはできない。金に支配される以上に強権によって支配される社会は都市生活になれたものにとっては逃れようのない苦しい状況をつくり出した。しかし、一九七八年には農業生産も一応軌道にのりはじめ、カンボジアはアフリカに米を輸出し、(飢餓輸出と後に云われたが)アンコール・ワットにはバンコクからの観光客を受け入れはじめた。建国以来つづいてきた息づまるような国内

的な服従強化が少しゆるめられる可能性が見られようとしていた。ベトナム軍が侵入したのはその直後であり、ちょうど米の収穫がはじまったところだったのである。農民は土地をすてて逃げ、収穫物は予定通りベトナム兵の食糧となつた。

ベトナムの人口は約六千万、カンボジアの人口はその十分の一。しかし、カンボジアの方が耕地にしうる面積は広い。ベトナム人は一般に勤勉であり、特に北ベトナム人は気候風土と社会主義体制の影響から進取の気性が強く、質実剛健で秩序感が旺盛である。南ベトナム人は、土地が豊沢な上に自由主義圏に長らく属していたこともあり、人々は退嬰的で消費的でアナーキーでもあらんとされるが、カンボジア国民はその傾向に輪をかけたようだったとされる。カンボジアはわずかの労力を投入しさえすれば国土全体はいわば食糧の宝庫であり、内湖は魚であふれていたのだった。第二次大戦以来、歴戦の勇士の国だったベトナムからすればカンボジアを征服す

ることなど簡単なことだったのであり、勝敗は戦う前に決していた。

しかし、このようなことは何一つベトナムのカンボジア侵攻の正当な理由にならない。カンボジア共産党がベトナム共産党から分離し、やがて対決の姿勢にかわっていったのは、ベトナム共産党の意図が、インドシナ三国のベトナム連邦化の実現であるとするカンボジア共産党の民族自決の意図と全く相反するものだったからであった。インドシナの歴史は、カンボジアとベトナムとの間の民族的確執の軌跡であり、両民族は互いに領土的な不信感を抱いてきた。同じ、社会主義国でありながら、両国はこうして、泥沼のような戦争へと踏み込んだのであった。

3

ベトナムの大規模侵攻によってカンボジア国内に大量の難民が生じた。一九七九年秋にはタイ・カンボジア国

境にはおよそ百万の難民があふれ、タイ領に流出した数十万人はタイ領内のホールディング・キャンプに収容され、国境付近の山間部や森林地帯にとどまるものはそこに無数の仮小屋をたてて住みついた。いわゆる難民村である。こうしたニュースは悲惨さを伝える報道写真やテレビ・ニュースを通じて日本にも知らされた。国連の難民高等弁務官事務所（UNHCR）、ユニセフ、国際赤十字などの巨大組織はもとより、欧米の大小の救援団体がタイ・カンボジア国境方面での救援活動をはじめた。

日本政府も救援資金の援助をはじめ、難民の国内受け容れの分担（当初五〇〇人）の確約を余儀なくされた。新聞社は難民救援のキャンペーンをはじめた。ベトナムからの大量のポート・ピープル（主として中国系ベトナム人）が香港あるいはタイに向って漂流し苦難の末に難民キャンプに収容されるニュースが、カンボジア難民の報道に重なり、インドシナの戦乱の複雑さを人々に印象づけた。



京都でKRRP（カンボジア難民救援会）が主婦と学生によって救援のための街頭カンパ活動をはじめたのはその年の暮れだった。KRRPのメンバーは四条大橋の上に仲間と一緒に立って、川風に身をさらしながら道ゆく人に救援をよびかけた。集められたカンパははじめタイルの現地向う日本の民間医療団に送られた。街頭カンパは熱心に続けられた。集められた資金を確実にカンボジア難民にとどけることが重大な課題となった。そのための唯一確実な方法は、資金をタイで救援物資にかえ、自分たちの手で難民村までとどけることであった。この着想は事務局長が三月に現地に単身で二週間の視察を行った結果生まれたものだった。タイ領内のキャンプにいる人々より、救援の手がとどきにくいカンボジア領内に直接必要物資をとどけることが緊急の必要事であるとKRRPの事務局長は考えた。そのためにはKRRP独特の救援活動を行う現地駐在のボランティアが必要となった。学生、看護婦などから協力者が出た。こうしてKR

RPの活動は次第に軌道に乗りはじめた。厳寒から酷暑に至る期間、連休も返上して学生、主婦、そして宗教者、中学高校生が街頭で募金を行った。この人々の示した努力は並のものではない。それは政治的な事態にかかわるものでありながら、党派を越えて、難民の窮状を救うための人間的情愛のあらわれであった。KRRPの集会ではいったいどの党派を救うのかという疑念がメンバーから提起されることもあったが、答えはつねに一致して「どの党派でもよい、難民に直接救援物資を届けさせてくれるのなら、」であった。救援はポル・ポト派、ソン・サン派のみならず、プノンペンに対しても行われた。救援は人命を救うことが目的であり、物資は主として食糧と医薬品であった。このほかに、KRRP派遣の学生ボランティアはタイ領内のトランジット・キャンプで学校の校舎を建てた。このキャンプは海外移住のきまつた難民を一時的に収容していた。

わたし達が深夜バンコクを発って、早朝にクメール・

ルージュの本拠地に着き、医薬品をとどけたのもこのような活動の一端としてであった。

4

「キュー・サンパン首相がお見えになります」とN君がやや緊張した面持で云った。私たちは立ち上って、闇の中から一列になってあらわれ、次々にアセレンの白熱ランプの光を浴びて小屋の中に入ってくる人々を拍手で迎えた。先頭の中肉中背の人物が首相で、彼がわれわれ一人一人と親しく握手をしたのち着席すると、他の閣僚数名も席に着いた。一九三一年生れのキュー・サンパン首相は年令が五〇才、霜が降ったような髪を短く刈り込んでおり、年よりふけてみえるが、微笑すると表情は一気に若々しさをみせる。彼は早速クメール語で挨拶をはじめた。紺色の半袖の開襟シャツの下の頸や腕は陽灼けしていて、そのため、この人物に政治家というより軍人の雰囲気を与えている。彼は自分の側近の通信相、社

会問題相、赤十字副総裁などを紹介した。この閣僚たちはそれぞれ半袖シャツの軽装で、場所の雰囲気からどの人物も、日本の田舎によくある夕涼みがたらに催された隣保会の出席者たちのようにみえた。しかし、のちに判明したところでは、この人たちはいづれも皆かつてフランスに留学していたエリートだった。

キュー・サンパン首相は通訳を入れて約二時間近く演説をした。その内容は主としてベトナム政府の糾弾と反ベトナム民族統一戦線の結成の必要をうたったものだった。彼は戦況が徐々に民主カンボジア軍にとって有利に立ち直りつつあることを説明した。彼の背後には透明のビニール・シートのカバーをした縦横三メートルばかりの巨大なカンボジアの地図が固定してあって、側近の一人は手に持った小枝で問題の地域を指し示した。

私たちがカンボジアを訪れた時期に先立つ約一ヶ月前、ベトナム軍はクメール・ルージュの殲滅を図って大規模攻防をかけ、タイ・カンボジア国境に近いプノム・

マライ山の攻防戦が行われた。その際、ベトナム軍の一部は一時国境を越えてタイ側に侵入し、クメール・ルージュを包囲する作戦に出ようとしてタイ軍に撃退されている。中国政府はベトナム軍が再度タイを侵犯することがあれば北ベトナム国境から懲罰のための攻撃を加えるとハノイ政府に警告し、ベトナム軍はマライ山の攻略をあきらめた。この時期、タイ・カンボジア国境付近には百万に近い難民があふれでていた。後にある消息筋からプノム・マライ山付近が何故数万のクメール・ルージュの兵士を擁し難攻不落であったかの理由を聞かされた。この付近は一種の巨大なカルスト台地が密林に覆われており、無数の巨大な鐘乳洞が数万の兵士を砲撃や空爆から護ったというのである。

キュー・サンパン首相はベトナム軍がカンボジアの非戦闘員に対して行ってきた数々の残虐行為について糾弾する発言を行い、この行為の源泉がいわゆるベトナムを盟主とするインドシナ連邦構想にはかならないと主張し

た。彼はカンボジア人民の反ベトナムの意志が強固である限り、また、民主カンボジア政府にたいする国際的支援が継続する限り、カンボジアがベトナムに併合されることはないと言説した。しかし、カンボジアの首都をベトナムに奪われ、そこに政権が樹立され、カンボジアの東部のメコン以東地域へのベトナム人の入植が進められていることを、ベトナムによるカンボジアの歴然たる領土侵略の証左であるとした。インドシナが仏領であった一九三〇年代からすでにベトナムの共産主義者はインドシナ連邦構想を立てており、第二次大戦中の日本占領の時期、その後の抗仏闘争、さらにはベトナム戦争を通じて、その構想が強められていったいきさつを語るとき、キュー・サンパン首相は、経済学博士らしい淡々たる口調で語った。私たちは首相の演説が熱を帯び、長くなるのを覚悟した。夏の夜はまだ始ったばかりであり、アセチレン・ランプがたてるかすかな噴射音のほか、木々の梢で鳴きかわす奇妙な夜鳥の声以外には静かな講義調の

首相の演説を妨げるものはなかった。もし、何百万という人々が、現在このインドシナで飢えと弾圧に苦しんでいるのでなければ、このひとときは、カンボジア現代史の林間学校の夏季講座といってもよかった。しかし、私たちに、腑に落ちないことが沢山あった。第一にポル・ポトが首相であった時代（一九七五—七八年）に行われた組織の名による大量の虐殺と餓死、病死、その他苦役がもとの疲労死から、ありとあらゆる原因がもって生じたクメール民族の大量死の問題をどうとらえるのか。

この疑問は、キュー・サンパン首相の演説が終りにさしかかるにつれて深まった。首相が、取材に訪れた日本人ジャーナリストが帰京後マラリアで病死したことに哀悼の意を表明して、日本とカンボジア人民との連帯を強調して演説を終ると、私たちは拍手をして一時休憩に入った。お茶が出て、昼間の時間に入ると、私はまずきわめて単純な問いを發した。カンボジアの人口を私は尋ね、カンボジア・ベトナム戦争の死者の数を尋ね、ポル・ポ

ト時代の天下放政策の結果失われた人口について尋ねた。首相は正確な数は不明だということわりつつ、ベトナムの侵攻以前の死者の数を数十万とし、侵攻後の死者を合わせるに百万近くなるだろうと述べた。私の単純な問いは長い答弁をひき出した。首相が強調しようとしたのは、大量死の直接原因はつねにベトナムの策略であり、天下放政策が多大な犠牲を伴ったにせよ、もし、ベトナムの侵攻（一九七九年末）がなかったとしたら、あと数年後には完全に軌道に乗って成功した筈だったという。

ベトナム軍の侵入によって建設途上の運河網が至るところで破壊され、水利は完全に破綻させられたと首相は云う。いわゆる天下放政策が急激かつ強引でありすぎたために多大の死者を生ぜしめたことを彼は卒直にカンボジア共産党の失敗と認めつつ、「もはや、われわれは社会主義の路線を捨てた」と明言した。彼の言わんとする意味は、民主カンボジア政府が再び復権し、プノンペンにもどる日がきても、中国型の人民公社をモデルにした農

業政策はとらないと言う意味である。「しかし、(と首相はつけ加える) 大下放政策の時期の人民の苛酷な処刑は、特に知識層にかんする処刑はベトナム側の潜入工作員の仕業です。何故、われわれが自国民の大量の死を求めようか。それを求めるのはカンボジアを徹底して無力化し、支配下におこうとする外部の陰謀でなくて何でしょうか」と彼は顔を紅潮させた。私はその答弁で充分納得しはしなかったが、質問をそこで打ち切って、KRRPの事務局長が救援のあり方や要望についてのやや具体的な質問をはじめるとに委せた。私たちは、この地域での難民やゲリラ兵士の家族にとっての食糧と医薬品、そして日用雑貨が絶体的に不足していることについて他の閣僚からの報告をきかされた。それは私たちがすでに充分予想していたことではあったが急迫の度合いはきびしいものであった。その実体を、私たちはその次の日、二つの村を巡回して見ることになる。住民の大半は栄養失調にかかっており、そのために、マラリアが猛威

をふるっており、村は全般的に生氣のない人々の顔で満ちていた。政治上の失策が人民の上にどのような不幸をふりまくのかを目のあたりにするのは胸をつかれる思いをさせる。

その夜、私はよく眠れなかった。それは人々の不幸が私の胸をつきさした為というより、私の枕許で一晩中づくクメールの歩哨たちのささやき声のためであった。私の枕から一尺はなれたところにかやを編んだ壁があり、壁の外側に警固の兵士が数時間交代で二人一組で立ち番にあたり、彼らはその間小声で学習討論をしていた。はじめの一組は色々の国の名がしきりに出てくる話題をかわしていたが、次の一組は初歩の英会話の練習を行った。前の晩、車に揺られつつづけていた私にとって、眠りが妨げられることは辛いことだったが、難民の苦しみに比べれば問題ではなかった。やがて、うるしのような闇が次第に青味がかかり、鳥の声と共に夜が白みはじめ、警固の兵士の話し声もいつしか途絶えがちになると私も眠

りに落ちた。

5

翌日、私たちは山中の二つの村を視察した。村の名は「新しい村第一、第二」と云うのだと告げられたが、前の晩、大地図を前に「今我々のいるところはどこか」ときいたときも政府の幹部は笑って教えてくれなかった。人工衛星からの写真を分析すればこの司令部の位置は適確に割り出すことはできるだろうが、ゲリラ兵のレベルからすれば村の位置は戦略上の秘密であるにちがいない。何しろ前線まで一〇ないし一五キロの距離であることは村の概要を説明する幹部からきき出したが、そのことより、私には、アンコール・ワットまで南々東に直線距離で八〇キロということの方が興味深かった。これを書いている現在ではそのときから一年数ヶ月たっているだけに、前線は今では何十キロか遠方に移動したと思われる（地図を参照）。

村の小屋がけの病院の近くに数百名の村民が男女別々に整列しており、我々が近づくと全員が拍手で迎えた。皆一様に陽灼けした渋皮色の顔色で、表情は固く土から生れ土になっていく形容がふさわしい農民たちである。男女が別々に整列しているのも異様だったが、男たちは全員民兵つまりゲリラ兵であった。正規軍の兵士が菜っ葉服をきて草色の丸帽をかぶってサンダルをはいているのに比べ、この民兵たちは黒ずんだ粗末な服装で、はだしだった。女たちの服装も似たりよったりだが、こちらには多少とも赤味を帯びた紫のブラウスなどがまじっていた。病棟の前の納屋には我々の届けた医薬品が山ずみされ、その前で授与式が行われ、民主カンボジアの赤字副総裁がKRRPの事務局長に感謝状を手渡し、見まもる村民が拍手しているところを写真にとった。事務局長が数分間の簡単な挨拶を行った。一言言い終ると通訳がそれをクメール語に訳す、ただちに拍手がわき、ぴたりと止んで次の一言を待ち、訳をきくとまた拍手が波

のように起る。これは社会主義国に共通というか、中国の集会での作法を想起させるものだった。事務局長は災天下に病人が立たされているのは気の毒だから、腰をおろすか病室にもどるように云い、通訳のN君はそれをクメール語で伝えたが誰もその場所を動かなかった。十分ほど式が終わると皆解散したが、その間村民の誰からも笑顔をみなかった。カメラを向けて微笑をさそうようにこちらが笑っても、きまりのわるそうなゆがんだ表情がもどってくるだけだった。皆病気なのだから止むを得まいと思うが、いったいこの無気味な雰囲気と表情は何に原因するのかと得体の知れぬ不安を感じさせられた。

小屋がけの病室は病院というよりはよし張り海水小屋に似ていた。竹で編んだ寝台に横になっている貧血でやせ衰えた女たちは、眼の光が全くない。男の病棟の方には地雷で足を失った兵士がうつろな眼で天井をみている。脾臓がはれて腹のつき出した子供がいる。同行した医学生が聴診器をあてたり、まぶたを裏返してみたり

している。殆んどの子供が慢性の栄養失調でマラリア患者である。彼らは子供なのに老人のような表情をしている。何にも興味を失い、笑いを失ってしまった。

はじめてみた村民たちの多くが病身の人たちであったということ、この村についての特別な印象を強調することになった。つまり、ここがクメール・ルージュの支配下であることをあらためて想起させた。彼らから微笑を奪ったのは戦争による逃避行の苦勞なのか。それとも、それに先立つ大量虐殺の忌わしい記憶なのか。あるいは、いまだに、そのどちらもの恐怖が将来もまだ起りうる状況から逃げ出せざにいるということを殆んど絶望的な気分で見覚しているためなのか。この人たちの眼は一樣に一種云い難い絶望感をたたえていて、生の意志がすがるうとしたものにすべて裏切られたことを物語る目だった。その目は何かを見ているようで見ていず、目の奥には奈落があるような目だった。このような目は正視し難い恐怖をこちらに感じさせる。何ヶ月も泣きつづけ

て安心してしまい、ただ肉体だけが生きているような表情の人もいる。

こうした目や表情はタイ領内の難民キャンプでも、ノン・サン派の難民村でも見なかった。ウダーミアンチャイ州のこのボル・ポト派の村にくるまで、私は難民の表情はわれわれとそう変わらないではないかと思っていた。

サケオ第二キャンプではわれわれは寺にあつまつた難民たちが僧侶のために持参した様々な料理を粗末な鍋や皿に盛って振舞ってくれた。私たちがおいしいという遠慮せずにもっとたべると言って皆で陽気に笑った。私たちは沢山の会衆が声をあわせて読経をするのを静かに聴いた。ノン・チャンやノン・サメットの難民村では長蛇のようにどこまでも続く露店が並び戦後の焼跡の闇市を思わせた。そのあいだをとめどもなく難民が往来する様子は米をはじめ手製のパン、泥田でとったタニシや茄子、胡瓜、皮をはいだ大きな川魚にいたる食料品から、衣料、文具、医薬品、小道具類、ありとあらゆる雑多な

品物が路上や箱の上に並べられて、その向うに座り込んだ「店主」たちは、あたりに散ばる食物のかすに真黒に群がるハエを気にする様子もなく、災天下で大声で喋ったり、笑ったりしながら茶碗から雑炊のようなものを箸をつかって口のなかにかき込んだりしていた。難民たちが身につけている強烈な原色をつかった衣服は、黒一色だったボル・ポト時代の制服をかなぐりすてる自由さをあらわしており、雲一つない紺青の空と、道ばたからはじまるしたたるような緑に燃える田園と木立ちと対比して、強烈な色彩の乱舞となって網膜に焼き付いた。やがて夕方近く、遠方で雷鳴が轟くと、スコールの近いことを察知して、皆は一斉に店じまいをはじめた。たといしまい込む品物が少くとも土砂降りの数十分間が過ぎるまで濡らさずにおかなくてはならないからである。ありとあらゆるものが援助物資の横流しの結果であろうと少くともそこには生活の気ままさがみられた。——この自由な雰囲気がこの山中のボル・ポト派の「新しい村第一」



には欠けているように思えた。

6

第一の村の人口は約一五〇〇だったが、少しはなれたところにつくられた第二村の人口も大体において同じだった。しかし、第二村は第一の村にくらべてはるかに気楽な雰囲気だった。満面に微笑を浮べた村長が迎えに出て、村人たち、それも主として子供を抱いた女たちが五〇人ばかり親しげに寄ってきた。ここでは儀式めいたこととは何一つしなかったし、中国風の拍手の「応酬」もなかった。村長は戦闘で片腕を失った元ゲリラ兵士だが陽気な人物で、そのまわりの人垣からよく笑い声が上がってきた。第一の村の暗さのあと、母親たちの微笑を見出して救われる思いだった。食糧事情もマラリア患者の数も第一村とほとんどかわりがないのに、この子供たちは何となく表情が明るく思われた。村の中を巡回すると、高床式の一坪ばかりの小屋の中に老女が幼児を膝にのせて

坐って、齒のない微笑を送ったりする。「ソムリア・ハイ！」（今日は！）とか「オックン、オックンチュラム」（ありがとうよ）などとうるおぼえの挨拶のことばをかける。彼らはほとんどみな合掌の挨拶を返して行く。この合掌の仕草は美しい。若い娘が鼻の前で手をあわせ、恥し気に微笑したりする様子は実に可愛らしい。年配の女性はお齒黒にしている、笑った口許が穴のようでは、筆者は幼年期にみた近所の老女を思い出した。日本ではとうの昔に失われた風俗がまだこの人たちのあいだではのこされている。

クメール・ルージュの兵士たちが村からはなれた山上の平地で軍事訓練をみせてくれた。前線から交代で休養にもどってきたらしい約百余名の兵士が疎林を背景に整列している。彼らの前には中国製の六二ミリ迫撃砲、DK八二ミリ砲、カラノップ機関砲、DK七五ミリ対戦車砲、一二・八ミリ重機関銃、CKC四対戦車砲、それにソ連製八二ミリ迫撃砲、などが並べられている。隊長が

全員に休めを命じたあと、我々の質問に応ずる。彼はこれらの武器がすべてベトナム軍から捕獲したものだという。捕獲した場所は、トンレサップ湖の北の国道六号線、アンコール・ワット近くのシエムリエブ、プノム・

マライ山近くのチャクレイなどで、その土地の名はゲリラの出没する地区をあらわしていた。兵士たちはつねに三名一組で行動し、一人につき弾帯に一二〇発づつ携帯している。隊長は二八才。兵士たちはほとんどが二〇代だがまれに三〇才以上の兵士もいる。しかし、彼らをそばでみるとどの兵士も信じ難いほどの童顔で、日本なら中学生に軍服を着せた感じである。「きみは一四か一五くらいだろう」ときくと、「いえ、二一です」などという答えがかえってくる。眼は少年そのものの純真さを示し、少し大き目の軍服が本当に二〇代だろうかといぶかしくさせる。しかし、本当だった。彼らは平均身長も一六〇センチ前後で少年のようだが、すでに大人であるというのは栄養不足のせいだと思える。これは敗戦直後、

米軍が日本を占領したとき、マッカーサー元帥に「日本人は一三才くらいの精神年令だ」と言わせたことにどこかしら共通するものがある。

広場のはしで演習がはじまるのを待った。そこから南にダンレク山脈は急な傾斜になって下り、疎林と背の高いカヤのような草の生いしげる台地の彼方に広大な海のようにひろがる緑の平野が見下せた。「あの向うがアンコール・ワットです」と政府の要人のひとりが指さした。地平線のあたりは群青色にかすみ、平和そのものに見えるが、一〇キロ先にはベトナム兵がいるという。

広場の彼方には草地在りひろがっている。「ゲリラが近づいてくるのがわかりますか」と隊長が我々に注意をうながす。私たちには風にそよぐ草地と、その中にまばらに立つ樹木しか見えない。「ほら、あすこにもここにも草がゆれているでしょう」と言われるが、草はどこをみても風にゆれている。そのうちに、やっと一人の兵士の背中にのせた偽装の木の枝を確認した。しかし、その数

秒後には、もう十名以上のゲリラ兵が草地のはしから広場に姿を現わしていた。「向うからも登ってきます」と隊長は下の台地に注意をうながす。見おろしている我々が草のあいだの兵士を発見できずにいるうちに数組の兵士たちは対戦車ロケットを肩にかついだ姿でいきなり姿をあらわし、カメラをかまえる間もない我々のそばをかけるのぼっていった。そのとき私のそばに坐っていたボランティアの女性が悲鳴をあげて立ち上った。次の瞬間私は若い兵士がふりあげたホーチミン草履で女性の足許の蛇を即座にたたき殺したのを見た。毒蛇には気の毒だったが、兵士が野性的な本能をバネのような筋肉の中に秘めているのを垣間見た気がした。

7

夜、再び深夜の道をバンコクに向う。隣りに坐った政府の要人は、私が話しかけるたびに身じろぎして膝の上においた袋の中に手を入れる。その仕草は袋の中の物を

探すように見えたが、私が話しかけるたびに、いらいらさせるようなその仕草が繰り返される。私はポケットの中に入る録音機をこの人たちはもっていないのだと察した。彼は自分から私に話しかけることはしなかった。私は少し不安を感じたが、私の喋ったことは、アンコール・ワットの様式やその保存についての感想だった。私が話しかけるのをやめて、しばらくすると、この人は眠りに落ちていた。私は税関を通過したばかりの人が、ほっとして思わず口にした言葉から密輸品を嗅ぎ出す取締官がいるというどこかの国で聞いた話を思い出した。朝のバンコク市内には既に騒々しい日常がはじまっていた。信号が青になるとレースさながら先を争ってとび出してゆく車の流れを目で追っているうち、私は自分が訪れた山の中の村が急速に非現実的なものになってゆくを感じていた。その村が実在していることを確認することはいくらでも可能なのに、その実感は遠い昔の出来事を描いた映画を見たように希薄になりつつあった。私

は自分がメモをとったノートや何本かの撮影済みのフィルムがかるうじて記憶をつなぎとめるだろうと思った。しかし、私が山中で見た世界は、急激に変転する現代史の一時点であり一局面であった。それは何よりも一九八〇年夏のカンボジアの北西部の「解放区」の姿であった。この後、三度、それも更に長期、私は別の解放区を訪れることになる。しかし、最初の訪問で受けた衝撃は二度とは起らなかった。私は難民たちの実情をよりくわしく知ることになり、そのたびに訪れた地域はより正確に、より実在感をもって私の心に残った。ウダーミアンチェー州の司令部の重要性は、おそらくそれから一年半近く経た現在減少していると思われる。解放軍の勢力は拡大し、彼らの支配地域は拡大した。プノム・マライ山の攻防戦は遠い昔となり、ベトナム軍のヘリコプター基地も解放軍の手に落ちて久しい。あらゆる点で、解放軍側はその勢力を回復するにつれ、その支配の性質が表面的には微妙に変わりつつあるのを感じさせる。タイ・カン

ボジア国境の町アランヤプラテートから南へ三〇キロの解放区ノム・プルーの司令部の建物も新たな地所に建て変えられた。国連での民主カンボジアの議席は三度確保され、ノム・プルーのモデル村では真新しい赤十字の腕章をつけた若い娘たちが、一列に並んで新病棟のための屋根にするかやの葉を束ねて手ぎわよく編み上げながら笑い声をあげ、野外劇場ではココナツを打ち合わせてリズムカルな民族舞踊を舞っている。チャクレイの村では病院にマラリアの患者が幾人も無言のまま横になっている。その外にはたくましい実をつけたトローモロコシ畑が刈り入れを待つて乾いた葉ずれの音をさせている。未来に希望が持てそうで、しかも絶望が隣り合わせになっている生活の中で、土間の教室の子供たちが一斉に九九を暗唱するはじけるように威勢のよい声が暗然たる気持を懸命にひきたたせる。この国はどうなるのか。それは少しづつ力を失ってゆくのか、それとも今は高熱に病んだ体がゆっくり回復を待つ時期なのか。シンガポールでの

反ベトナム統一戦線の結成のための三者会談にあらわれたキュー・サンファン首相は明るい色の背広にネクタイをしめて記者団に微笑をふりまき、終始難しい表情のソン・サンKPNLP議長や、自己宣伝に余念のないシヤヌーク殿下にはみられない自信と余裕を示していた。

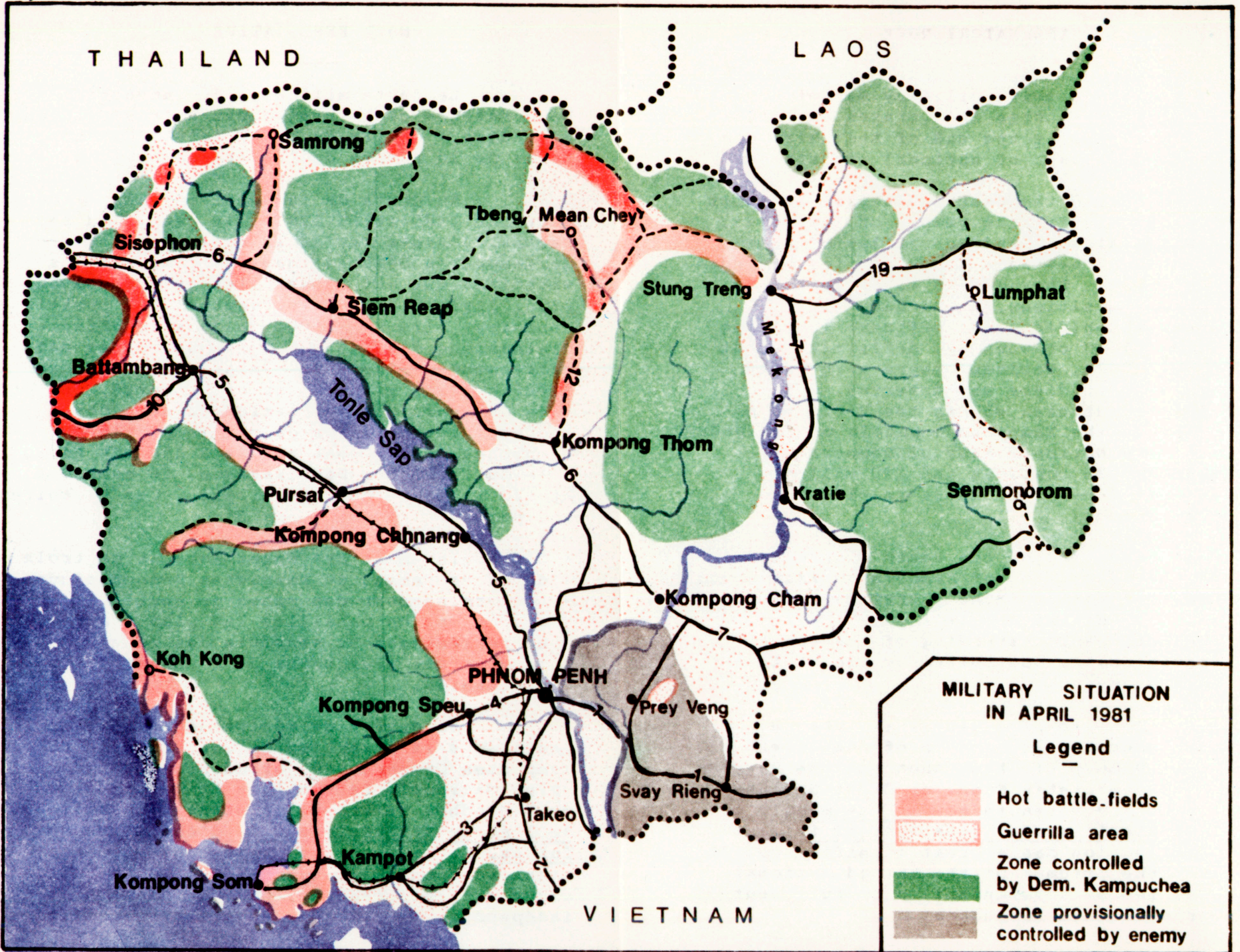
カンボジアの過去——それは急激に遠くなりつつある。それはその犠牲者にとって忘却しきれない重さを持った過去の事実であるにもかかわらず、時はその苦悩の記憶を犠牲者の周辺から徐々に、しかも確実に押し流してゆく。我々はカンボジアが過去において流した途方もない数の人々の血と、苦渋にみちた汗と涙をどのようなかたちで記憶の中にせきとめておくことが可能だろうか。それは決して洗い流してしまっただけではない歴史の教訓であり、しかも、その恐怖に満ちた歴史はいまも長い尾をひいている。社会主義の理想が、少数者の机上プランンとして説かれ、彼らの純情さと無知と力への過信が、その理想の実現を血ぬられた地獄図に変えてしまっ

た。歴史の教訓はいつの時代も権力の担い手によって無視されてきた。人間が雑草のように根こぎにされて灼かれてゆく時代、それは第二次大戦と共に終わったのではなく、今も、無気味な口を開けている。

人間の権利とはまず生きることにはじまる、という、これほど単純で基本的なことが何よりも困難になりつつある時代がこれからはじまろうとしているのだろうか。インドシナにおける人権問題の解決は、ベトナム・カンボジア戦争の早期の収拾にかかっているが、その収拾のための努力は、社会主義の政権のあり方にかんする本質的な見直しという今日の最大の思想的課題を解くための貴重な手がかりをもたらずであらう。

資料 (1) 民主カンボジア政府発行の一九八一年四月現在の戦況。

資料 (2) その解説と読み方の凡例 (英文)



## EXPLANATORY NOTE

The herewith military map of Democratic Kampuchea illustrates the military situation at the end of the third dry season of the war of national resistance.

During the past dry season (October 1980–April 1981), the people of Kampuchea, the National Army and guerrillas of Democratic Kampuchea have won victories beyond expectations. They destroyed or captured 512 enemy positions, wiped out 75,000 Vietnamese soldiers and officers including 45,000 killed or wounded, definitively put out of action. Besides, there were 7,000 Vietnamese soldiers who deserted, were killed in mutinies within the Vietnamese army or by the Kampuchean people or surrendered to the National Army of Democratic Kampuchea. 26 communes and 120 villages have been liberated. These results have brought about:

- The broadening of the zones controlled by the Government of Democratic Kampuchea,
- The broadening of the guerrilla zones and the hottest battlefields,
- The noticeable narrowing of the zones provisionally controlled by the Vietnamese enemy.

The war of national resistance waged under the leadership of the Government of Democratic Kampuchea and the Patriotic and Democratic Front of Great National Unity of Kampuchea is now in the middle of the strategic stage of balance of forces. This situation has a great significance. It augurs the triumph of the sacred national cause, for an independent, peaceful, neutral and non-aligned Kampuchea.